

覚範慧洪に対する評価

——『人天眼目』への引用を中心として——

小 早 川 浩 大

一．はじめに

北宋後期の臨済宗黄龍派の禅僧、覚範慧洪（一〇七二～一一二八）は生涯に数多くの著作を残し、『林間録』（一二〇七）や『禅林僧宝伝』（一二二二・以下『僧宝伝』）などは、五灯などが伝えぬ貴重な資料を今に伝える。ただし、その記述に対しては、大慧宗杲（一〇八九～一二六三）などの禅僧に「誇大な表現」、「憶測多く事実と反する」との発言が見られ、また、士大夫の晁公武『郡齋讀書志』（一二五二）には「著書は数万言なり。林間録、僧宝伝、冷齋夜話の類、皆世に行われる。然れども、夸誕多く、人の之を信ずること莫しと云う」とあるなど批判の声も多くある。しかし、他の禅僧の語録や著作にその引用を多く見ることができ、少なくとも晁公武のいう状況ではなく、特に『人天眼目』においては重要な資料として取り上げられていると思われる。そこで、『人天眼目』への引用から見える慧洪に対する評価について一考察することとし

たい。

二．『人天眼目』への引用について

『人天眼目』は南宋の淳熙十五年（一一八八）、晦巖智昭により編纂された五家の綱要書で、約二〇年間の資料収集期間を考慮すると、慧洪没後四〇年頃に準備された書である。⁽¹⁾本書における慧洪の著作の引用については、拙稿⁽²⁾において慧洪の名「寂音」が付されるものを中心に全部で十六ヶ所あることを確認した。また、それらが慧洪の複数の禅関係の著作から引用されていることも確認した。その内訳は、卷一・臨済宗章に三ヶ所、卷三・曹洞宗章に十一ヶ所、卷五・宗門雜録に二ヶ所であり、このことから曹洞宗章を中心に引き上げられていることがわかる。そこで、曹洞宗章の引用箇所について見ると、「五位君臣」（『僧宝伝』卷二）、「寂音正五位之訛」（『石門文字禪』卷二五・以下『文字禪』）、「五位頌」（『智証伝』他）、「寂音說王種内紹外紹」（『智証伝』）、「曹山三種墮」（『僧

宝伝』卷一・一三）、「正命食」（『智証伝』）、「不断声色堕、随堕、尊貴堕」（『智証伝』）、「寂音三堕頌」（『僧宝伝』卷一三）、「三種滲漏」（『林間録』上）、「曹山三種綱要頌」（『林間録』上）、「宝鏡三昧」（『僧宝伝』卷一）となっている。

三、「曹洞宗章」引用箇所の問題点について

まず、慧洪の五位に関してはいくつかの問題点が指摘される。第一に第四位に関してである。慧洪は偏正五位を第四位「偏中至」とするが「曹洞宗章」では他は皆「兼中至」とする^③。第四位「兼中至」が文献的に確認できる最初のものは汾陽善昭（九四七～一〇二四）であるが、これは第一位を「正中來」として列位が他と異なっており、他と同様のものを伝えるのは石霜楚円（九八六～一〇三九）からである。さらに「曹洞宗章」を総括する「曹洞門庭」においても「兼中至」とすることから、慧洪のみが「偏中至」を伝えていることになる。このことについては、後の永覚玄賢（一二五七～一六五七）『洞上古轍』において「寂音改兼中至為偏中至、以對正中來、大誤後學。今為訂之」（『正統蔵』一二五卷七一頁上）と非難される。第二に解釈について、『智証伝』「洞山五位」では「正中來則独倡而未和。偏中至則賓主協和也」として、「偏中至」としながらも「兼中至」と同様の段階的解釈を行っていることが指摘される^④。ちなみにこの「洞山五位」は『林間録』の

「洞山安立五位。道眼明者視其題目十五字排布則見悟本老人。如曰、正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到、是也。汾陽頌曰、五位參尋切要知、纖毫才動則差違。金剛透匣誰能解、唯有那吒第一機。舉目便令三界淨、振鈴還使九天歸。正中妙挾通回互、擬議鋒芒失卻威」（『正統蔵』一四八卷六〇一頁上）

と同様に汾陽の頌が付されており、その解釈に影響があるものと思われる^⑤。

また、慧洪の伝える「五位君臣」（『僧宝伝』卷一・『正統蔵』一三七卷四四六頁中）は、偏正五位と君臣とを組み合わせて用いるという独自の解釈がなされているとの指摘がある^⑥。

第三に成立の問題である。慧洪は五位を洞山良价（八〇七～八六九）の創唱とするが、五位の体系そのものが洞山の宗風には無いことから、それに嗣ぐ曹山本寂（八四〇～九〇二）が創唱したものであるとの指摘がある^⑦。

さらに記述に関しても、慧洪が伝える五位や三種堕等とは異なるものが『重編曹洞五位』（二二六〇）に「洞山五位顯訣」（卷上・『曹洞宗全書』注解五・五頁）、「三種堕」（卷下・同書五一頁）として見えることから、必ずしも慧洪の記述が唯一のものとは言えないという問題点がある。

四、問題点の考察

『林間録』には、尅符道者の四料揀偈と洞山の五位偈を並

記し、「臨濟・洞上二宗相須發揮大法。而是偈語、世俗傳寫、多更易之、以徇其私、失先德之意。予竊惜之。今錄古本於此、正諸傳之誤」（『正統藏經一四八卷六四三頁中』）との記述がある。

また、異なる五位偈の伝承に対する無尽居士張商英（一〇四三〜一二二二）とのやり取りの中で「其正中來曰、但能莫觸當今諱、也勝知朝斷舌才。先德之意雖明妙挾然、知朝斷舌必有本據、而言前古無斷舌事。矧又曰知朝尤無謂也。將非後世傳錄之誤耶。予曰、舊本曰、也勝前朝斷舌才、意用隋賀若弼之父敦為宇文護所害之、臨刑戒之曰、吾以舌死。引若弼舌、以錐刺之出血、使慎口。隋興唐之前、前朝刺舌、非知朝明矣。然斷舌、刺舌意則同耳。無儘囑予記之」（『林間錄』卷下・六三四頁上）とあり、慧洪が「古本」や「舊本」を用いていたことが述べられている。この他に『石門文字禪』には「又游曹山拜澄源塔、得斷偈曰、耽章號本寂禪師、獲五藏位図、盡具洞山旨訣。」（卷二六「題珣上人僧宝伝」）として「得斷偈」との記述もみることができるところから、五位に関しては底本となる「斷偈」や「舊本」「古本」に基づいて批判、訂正していたことが窺われる。また、『重編曹洞五位』には慧洪と同様の「曹山逐位頌」が伝わることや、慧洪以前の『天聖広灯録』巻一九「隨州雙泉山郁禪師章」（『正統藏經一三五卷七八六頁上』、『建中靖國續燈録』巻二三「雲居山元祐禪師章」（『正統藏經一三六卷二〇一頁上』）に既に「五位君臣」の語を見ることができ

ことなどから、慧洪が恣意的な改変や解釈をしたと言うよりも、灯史や独自に収集した資料に基づき記述しているさまが窺われる。

五. まとめ

洞山下の家風について、慧洪は龍牙居遁（八三五〜九二三）、報慈匡化（生没年不詳）に関する記述の中で「二老、洞山悟本兒孫也。故其家風、機貴回互、使不犯正位、語忌十成、使不墮今時」（『林間錄』巻上・六〇〇頁上）と述べている。そして、それらは前述の「臨濟、洞上二宗相須發揮大法」の他に「乃知、古老宿之語皆不苟然。符臨濟真子而悟本自爲洞山之宗、道本同也。而學者不了以私異之、惜哉」（『文字禪』巻三五「題冠符道者偈」）とあることから、臨濟の宗旨と対立しないものと捉えていることがわかる。しかし、それは言い換えれば、洞山の宗旨を自らの理解に引き寄せて解釈したことによるものとも言える。さらに、慧洪自身、後に自らの記述を改めているものがあること⁽⁸⁾から、慧洪の解釈や記述については注意を要するものであることは否定できない。そうではあるが、自ら散逸していた資料を収集し、伝の誤りを訂正し、衰微する洞山下の宗風を後世に伝えんとしたことは間違いなく、それは従来から指摘されるように慧洪の洞山下に対する思い入れの深さ⁽⁹⁾によるものと言えよう。資料の中には「三種滲漏」

や「曹山三種綱要頌」、「宝鏡三昧」等のように慧洪以前に遡ることのできないものも含まれている。後の『人天眼目』が多くを慧洪に依ったのは、それが貴重な資料を伝えていたからであり、その点について慧洪を評価することができると言えよう。

1 本書については、椎名宏雄「人天眼目」の諸本（『宗学研究』一九号・昭和五二年）及び「高麗版『人天眼目』とその資料」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』四四号・昭和六一年）に詳細な研究がある。二四種類の刊行本、六種類の筆写本の存在を確認し、これらが五山版（一三〇三）、高麗版（一三九五）、明蔵版（一五八六）の三系統に大別できるとし、それらの成立や本文の異同等が明らかにされている。なお、本発表に際し、椎名先生の所蔵する東国大学所蔵の高麗版とされる複写を閲覧させて頂いた。先生の御好意に対し、改めて感謝致します。

2 拙稿「覚範慧洪の評価について——『人天眼目』の引用から——」（『曹洞宗研究員研究紀要』三五号・平成一七年）では、引用箇所と著作を確認したもの。本発表ではそれらを踏まえ考察するものである。

3 ただし、高麗版のみは、慧洪の他にも「克符道者頌」、「汾陽昭頌」、「浮山遠頌」、「草堂清頌」、「宏智覺頌」、「自得暉頌」、「明安五位寶主」において「偏中至」としている。

4 松田陽志『洞上古轍』をめぐる偏正五位解釈の一視点（『宗学研究』第三八号・一九九六）。

5 汾陽の五位については桐野好寛「汾陽と五位（一）、（二）」

（『曹洞宗宗学研究紀要』第一一・一二号・一九九七・一九九八）に詳細な論究がある。

6 柳田聖山『禅の文化 資料編』京都大学人文科学研究所・一九八八）一七一頁で「注目してよいのは、恵洪がこれを五位君臣偈とすることで、洞山の作品そのものは、君臣の問題を含まないから、そこに恵洪の解釋が入っていることである」とある。

7 石井修道氏は「重編曹洞五位顯訣」所収の「五位顯訣」の古い伝承を認めることができたとしても、本書で問題にした雲巖の欠悟と深く関係するのであるから、五位の体系は洞山には無かったものと判断する」（『宋代禅宗史の研究』一九六頁）と述べ、曹山本寂の創唱と推定するとされる。それに対する洞山創唱説として、新井勝龍「兼帯思想と洞山良价」（『駒澤大学佛教学部論集』第二五号・平成六年）、兪炳根「洞山五位説と異類中行の問題」（『印度学仏教学研究』第五二号・平成一六年）がある。

8 拙稿「晩年の覚範慧洪の五家宗派観の変化について——『林間録』に見える記述との相違から——」（『宗学研究』四七号・二〇〇五年）参照。

9 前出『禅の文化 資料編』三二頁。

（キーワード）林間録、禅林僧宝伝、重編曹洞五位、石門文字禅

（駒澤大学大学院）

Rōan; ?582-709?). This slight contradiction poses important questions about Nanyue's position in the Dharma lineage.

Nanyue's memorial epitaph was made at the request of disciples of Mazu. The implication of this event reveals an intentional distortion created by linking the two masters' Dharma lineages, Huineng and Mazu. In fact, there is almost no historical evidence that can clearly show the successive transmission of the three masters in their Dharma lineage. From this point of view, it is possible to argue that their genealogy was created in response to the needs of the related Chan circle. Simultaneously, this argument even raises doubts about Nanyue's historical existence itself.

129. An Evaluation of Juefan Huihong: quotations from his books found in the *Rentian yanmu*

Kōdai KOBAYAKAWA

Juefan Huihong (覺範慧洪 1071-1128) who was a Chan priest in the lineage of Linji-zong Huang long-pai (臨濟宗黃龍派) during the Beisong dynasty (北宋) wrote many books in his life. His works, the *Linjian lu* 林間錄, the *Chanlin Sengbao zhuan* 禪林僧寶伝, etc., convey valuable records. Although his works were criticized as exaggerated and highly speculative by Dahui Zonggao (大慧宗杲, 1089-1163), it is found that some of his descriptions were frequently quoted by other Chan priests in their works. These quotations were adopted as very important records, especially in the late twelfth century *Rentian yanmu* (人天眼目) of Huiyan Zhizhao (晦巖智昭). This report attempts to consider the estimation of Huihong, focusing on quotations from his books found in the *Rentian yanmu*. Most of the quotations from his work were descriptions about the Caodong-zong (曹洞宗), and descriptions that cannot be found in others' works were included. From this, it seems that the book the *Rentian yanmu* is an important record quoting Huihong's works. In conclusion, we can give an estimation of Huihong because his works provide a valuable record of the Caodong-zong.